

# がん患者とHIV患者の高度薬学管理で、 薬局の機能分化を推進する

国が出した“患者のための薬局ビジョン”では、保険薬局の機能として、“服薬情報の一元的・継続的把握”“24時間対応・在宅対応”“医療機関等との連携”を掲げ、健康サポート機能や高度薬学管理機能を担うことが求められている。株式会社ファーマシィ もみじ薬局では、日本赤十字社 京都第一赤十字病院との密接な薬業連携によって、がん患者やHIV患者に対する高度薬学管理を行っている。その取り組みについて、同社医療連携部の竹内雅代課長代理と同薬局の谷村友美子薬局長に話を聞いた。

## 抗HIV薬の院外処方箋に対応

株式会社ファーマシィ(本社:広島県福山市)は“地域に根差した薬局を創造する”という理念を掲げ、全国10都府県で信頼される80薬局を展開している。その1つであるもみじ薬局が京都市東山区にある京都第一赤十字病院(666床)の目の前で開局したのは2004年のことだ。処方箋調剤、OTC医薬品販売、在宅医療などに取り組み、現在、常勤薬剤師3人、事務スタッフ2人で運営している。

「もみじ薬局の大きな役割は高度薬学管理業務にあります」と谷村薬局長は話す。いわゆる門前薬局の在り方が議論されているが、京都第一赤十字病院との密接な薬業連携をベースに、16年2月からHIV患者への対応をスタートさせている。1997年に京都府エイズ治療拠点病院となった同院では、抗HIV薬の院内処方以外に院外処方も実施し、約1年の間に6人のHIV患者の処方箋に同薬局が対応している。「HIVの患者さんだからといって、特に構えるという姿勢はありません。実は、皆さん以前から当薬局を利用されていた患者さんで、顔なじみでもあったからです」(谷村薬局長)

京都第一赤十字病院の担当医師とは良好な関係を保ってきており、15年9月に同院でHIVに関する勉強会が行われ、谷村薬局長は注意事項などをしっかりと学んだ。そして約半年後に、HIV患者で同薬局での院外処方に同意した人を受け入れることになったのだ。

「抗HIV薬も他の薬と変わりません。注意しているのはプライバシーの配慮です。薬の名前を言わないこと、欠品しないように在庫管理をすることなどです」(谷村薬局長)

同薬局では、プライバシーに配慮しつつ、一般の患者さんと区別することなく、オープンな環境の中での対応を行っている。担当医師からは、患者さんに応じた服薬支援をしてほしいと依頼を受けている。HIV治療は終わりが無いので、今後、患者さんの高齢化への対応が課題になってくるという。竹内課長代理は、「在宅医療を見据え、患者さんが社会から孤立しないように支援していく必要が出てくると考えます」と話す。

## がん患者への対応から始まった 高度薬学管理

もみじ薬局の高度薬学管理は、京都第一赤十字病院のがん患者への院外処方に対応するところから始まった。京都府では全国に先駆けて、10年4月に京都府薬剤師会と京都府病院薬剤師会の組織統合が行われ、社団法人(現一般社団法人)京都府薬剤師会として約3,000人の会員を有する組織となった。これは、医療の高度化・多様化、薬剤師の職能の広がりや深まりによって薬業連携が必要となってきたことに起因する。

こうした流れの中で、京都第一赤十字病院との薬業連携を深めるための事業が行われてきた。まず、11年に京都府薬剤師会の東山支部勉強会が開催された。

「病院薬剤師と薬局薬剤師が“顔の見える関係”をつくることを目的とし、勉強会を年4回開催しています。病院と薬局でそれぞれの“知識・技能”“業務内容”を測る目安となりますね」(竹内課長代理)

12年からは地域の薬局による東山合同勉強会をスタート。症例ベースの勉強会を行うことで薬局薬剤師同士の顔の見える関係を構築した。

そして、14年からは東山がん化学療法勉強会を開始した。「薬局でのがん化学療法をフォローする上での難しさは、処方箋と患者さんからしか情報を得られないことにありました」と話す竹内課長代理は、シームレスな薬学管理のためには病院と保険薬局で情報の受け渡しを行う連携が必要だと指摘する。

同勉強会では、京都第一赤十字病院薬剤部のがん薬物療法認定薬剤師と共に3つのプラン(図)を立てて、14年は4回開催した。がん化学療法の目的、適応条件、有効性・安全性、モデルといったテーマで、実際の院内症例のカンファレンスを実施し、「病院での実態がつかめ、参加者の満足度は高いですね」と谷村薬局長は話す。

実際の情報共有においては、処方箋、お薬手帳、トレースレポートを活用している。処方箋に臨床検査値やレジメンを記

載し、お薬手帳には入院時の処方内容とその変更、退院時の処方内容を記すことで、薬局では退院後のフォローを確実にしている。「トレースレポートは、疑義照会するほどではないが、次回受診時までに主治医へ伝えたいことを記入することで、切れ目のない最低限の薬学管理が行えます」(竹内課長代理)

その他、15年には京都第一赤十字病院が病診連携のために日赤がん地域連携会を開催し、もみじ薬局と同院の薬業連携について発表を行うなど、同薬局では医師や看護師に情報発信している。

「急性期病院から患者さんが地域に戻るケースが増え、薬局の機能分化がさらに進む中で、私たちが取り組む高度薬学管理について、さらに情報発信をすることが必要だと考えています」(竹内課長代理)

## 今後増加する在宅医療への 取り組みも視野に

もみじ薬局は京都第一赤十字病院と密接に連携して、がんやHIVなどの高度薬学管理を推進していくが、もう1つの取り組みも視野に入れている。同社では、訪問看護師に同行した中で、今まで見えていなかった在宅医療のニーズがあることを知ったという。訪問看護師からは、薬局薬剤師が配薬や服薬についてもっと関わってほしいという要望が出された。

図 東山がん化学療法勉強会でのプラン

症例検討会を 学びの場とする	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 知らない専門用語を減らす</li> <li>● 治療の流れを診療ガイドラインで学ぶ</li> <li>● 実症例とその対応を学ぶ</li> </ul>
患者中心の知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 実際に患者さんに対応できる知識を学ぶ</li> <li>● 重要かつ緊急性の高い知識をまず学ぶ</li> <li>● 実症例とその対応を学ぶ</li> </ul>
お互いの立場を 学び合う	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 相談できる相手づくり</li> <li>● 病院ではどのような指導をしているか</li> <li>● 薬局ではどのような指導をしているか</li> </ul>

薬局薬剤師と病院薬剤師が臨床経験を分かち合うことで知識を増やし、指導の質を高めていく。



株式会社ファーマシィ  
医療連携部

課長代理 **竹内 雅代** 先生  
*Masayo Takeuchi*

1990年京都大学薬学部卒業。2005年株式会社ファーマシィに入社。もみじ薬局等を経て、16年同社医療連携部課長代理に就任し、現在に至る。



株式会社ファーマシィ  
もみじ薬局

薬局長 **谷村 友美子** 先生  
*Yumiko Tanimura*

2006年近畿大学薬学部卒業。同年株式会社ファーマシィに入社し、もみじ薬局等に配属。11年同薬局薬局長に就任し、現在に至る。

「そうした背景を踏まえて、もみじ薬局でも在宅医療に取り組んでいます。今後、地域の中で在宅医療は増えていくと考えられるので、当薬局が単独業務として行うのではなく、チーム医療の一員として関わっていくことが必要となります」(谷村薬局長)

現状での情報交換は紙ベースや電話などが中心だが、訪問看護師からは情報共有できることを感謝されている。同時に、同薬局の薬剤師にも訪問看護師からの情報は大きいに役立っている。そして、今後はチーム全員で情報共有できるようにしていきたいという。東山地域が高齢化が進み、これまで同薬局に来ることができた患者さんが来られなくなるケースも出てくる。そうした患者さんにずっと関わり続けていく。同薬局の薬剤師は認知症サポーターの資格を取得し、今後さらに増加する認知症の患者さんを支えていく準備も怠りない。

「高度薬学管理はもちろん、通常の処方箋対応や在宅医療などにおいても、薬剤師間で力量差があってもいいけません。誰が対応しても患者さんに満足していただけるよう、全体のボトムアップを図り、カンファレンスを行ったり、フォローアップ研修を実施したりしています。薬剤師がモチベーションを高く持ち、患者さんに明るい雰囲気でするように心掛けています」(谷村薬局長)

かかりつけ薬剤師や健康サポート薬局が目されるが、急性期病院と密接な薬業連携を図り、高度薬学管理を行う薬局の役割は重要だ。もみじ薬局は、京都第一赤十字病院とさらに連携を強めてその役割を強化していく。